

韓国人日本語学習者の意見文における 「のだ」の使用について

飯干和也*

(e-mail : iiho4@hotmail.com)

<目次>

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 5.1. 出現数と形式 |
| 2. 先行研究 | 5.2. 学習歴とSPOT得点との関連 |
| 3. 「のだ」についての本稿の立場 | 5.3. 用法と出現位置 |
| 4. 調査方法 | 5.4. 述部での現れ方 |
| 5. 調査結果 | 5.5. 不自然な用例 |
| | 6. まとめ |

キーワード：のだ(No Da), 使用実態(actual usage), 意見文(opinion statements), 話し言葉(spoken language), 書き言葉(written language)

1. はじめに

本稿は韓国人日本語学習者(以下、KR)による意見文¹⁾に現れた主節末の「のだ」²⁾に焦点を当て、KRが意見文において「のだ」をどのように用いているのか、その使用実態を明らかにするものである。

日本語の「のだ」に関する考察は膨大な蓄積がある。「のだ」には多様な用法があ

* 祥明大 教授, 日本語教育学

1) メイナード(2005)によれば「意見文」とは「書き手が自分の意見を伝え、読み手を説得することを目的としたディスコース」としている。
2) 「のだ」は名詞化の機能を持つ準体助詞「の」に「だ」が後接して一語化した助動詞である。論考によって「のだ」「のダ」等の表記があるが、本稿は総体的な事柄を述べる場合は「のだ」、「のだ」の形式に注目する場合は[]で括弧で[ノダ]とする。

り、それらを統一的に説明する考察に加えて、「のだ」の用法をどのように日本語学習者に指導するかという点について、これまで多くの考察がなされてきた。しかし、研究者の間でも「のだ」をどのように捉えるかに関しての共通認識は未だに無く、「のだ」の指導をめぐる多くの議論が交わされているのが現状である。

「のだ」をめぐる議論の一つとして、「学術論文やレポートなどのような論理性が求められる文章において「のだ」をどのように用いるべきか」を挙げることができる。清水(2012)は、論文やレポートの作成法を示す解説書の中に「のだ」の使用を避けるべきだと記す本がある事を指摘している。田野村(2002)は「のだ」の意味特性の一つに「既定性」を挙げ、「のだ」には「自分の知識の及ばないところでは真相がすでに定まっているはずだ」という話し手の想定(田野村2002:11)があるとしている。この「既定性」は話し手の主観を表すものであり、客観性が要求される論文などでは「のだ」の使用を避けるべきだとの見解はあながち的外れではない。しかし、「のだ」は学術論文でも往々にして目にし、今村(1996)は「のだ」は読者に伝えたい内容を読ませて納得させる談話構成と密接に関わっているため、論理的な文章を書く場合でも学習者に対して適切に指導されなければならないとの主張をしている。このように論理性が求められる文章において「のだ」を如何に用いるかは見解が曖昧である。

そこで本稿は論理的な文章の作成法を学ぶ際によく用いられる意見文を使って「のだ」の使用実態を調査し、「のだ」を如何に用いるべきかに関する指導の手がかりを得るための基礎的考察を行った。具体的には日本語母語話者(以下、JP)が作成した意見文とKRが作成した意見文に見られる「のだ」の使用実態を調査し、比較することによって、指導上の手がかりに関する知見を得たい。

2. 先行研究

本章では、まず日本語で書かれた学術論文における「のだ」の使用実態を調査した清水(2012)の考察を概観する。次に日本語学習者の「のだ」の習得、及び使用の実態を調査した考察を見ていく。

清水(2012)は、人文系5分野の論文50編を調査対象とし、「のだ/のである」で終止する文(以下、ノダ文)について、1.出現する位置、2.ノダ文と前後の文の主題の関わり

あい、3.ノダが出現する論文の類型について調べた。その結果、382例のノダ文があり、1.ノダ文は段落最終部に多く位置していること。2.ノダ文と前後の文では主題を表す助詞「ハ」が現れる場合が多いが、「ハ」が接続している名詞句は前文とノダ文、及びノダ文と後文で異なっている場合が多いこと。3.ノダ文は調査や実験を含まず、文献や資料に基づいて論述される〈論証型論文〉に現れやすいことを明らかにしている。以上から清水(2012)は論文においても論証型論文を書く場合には「のだ」は有効であると述べている。

次に日本語学習者の「のだ」の習得の実態を調査した考察を見る。大場(1995)はJP57名とKRを含む学習者57名を対象に○×形式の文法判定テストを行い、[ノダ]と[ノカ]の習得実態を調査した。その結果、1.[ノダ][ノカ]を使わなくては(使っては)いけない箇所でも「使ったほうが(使わないほうが)いい」程度に理解されており、2.前提Xが想定できるものよりは、できないものの方が習得が難しく、3.「因果関係」「判断、要求、勧誘、ことわり等とその根拠」「実情説明、言い換え」「本来述べたいことがあることを暗示する」の順に習得しやすいことを明らかにしている。

崔(2006)は「のだ」の機能を14に分類し、JPの使用実態と比べながらKRの「のだ」の習得実態を調査した。その結果、KRもJPもスコープの「のだ」、態度表明の「のだ」、文連結の「のだ」の順に使用率が高く、両者とも同様な「のだ」の用い方をするという。

続いて、学習者の「のだ」の使用実態に関する考察を見る。塚原(1998)は中国語と韓国語を母語とする学習者10人と対談を行い、「のだ」の使用実態を調査した。その結果、KRは個人差があるものの、中国母語話者よりKRの方が「のだ」の使用率が高く、また、学習レベルが上がるほど不必要な「のだ」の付加が多くなると指摘している。

松本(2004)は、KR30名の発話データを使って「のだ」の使用実態を調査した。その結果、学習レベルが上がるにつれて「のだ」が正しい用法で多様な形式をもって使用されるようになるが、それに伴って不適切な使用も目立つようになると指摘している。

若生(2011)はKR3名へのインタビューに現れた[ンデス]について使用数と使用率及び用例の分析を行った。その結果、1名にやや過度な[ンデス]の使用が認められた。他の1名は数値的に過度ではないものの連続して[ンデス]を使用する場合があります、これは学習者の言語処理の速度が落ちることに起因しているのではないかとしている。

宮内(2015)はJP32名分、KR48名分の発話データを使って、JPとKRの「のだ」の使用実態を調査した。その結果、JPとKRでは「のだ」の使用に関して用法上の違いがありJPデータでは「のだ」が談話を発展的に進めるための働きを担っているのに対し、KRデータは「のだ」がそのような働きを担っていないことを明らかにした。

習得や使用の実態を考察した先行研究からは、学習が進むと「のだ」を正用できる場合が増えつつも、不適切であったり過剰使用であったりする場合もある事が窺える。しかし、先行研究は話し言葉としての「のだ」が中心であり、書き言葉としての「のだ」の使用実態を考察したものは管見の限りでは見当たらない。

「のだ」は主観性が強い語であることを先述したが、論文においても「のだ」は用いられている。それならば今村(1996)や清水(2012)の考察から示唆されるとおり、「のだ」を論理性が求められる文章において、どう使うべきかを指導しなくてはならないだろう。それにも関わらず、これまでに書き言葉としての「のだ」の使用実態や指導に関する考察はされなかった。本稿は「のだ」に関する一連の考察の空白部分に焦点を当て、日本語教育の基礎的知見の発展に寄与したいと考える。

3. 「のだ」についての本稿の立場

本章では本稿が依拠する三つの考察を挙げ、調査する上での枠組みを示す。本稿は崔(2006)、최진희·조남성(2007)、野田(1997)に依拠して考察を行った。

まず、崔(2006)及び、최진희·조남성(2007)を概観する。崔(2006)は「のだ」に対応する韓国語の代表的な形式である「것이다」との対照研究を行った。최진희·조남성(2007)は崔(2006)に基づいて「のだ」の範疇を14に分類し、どのような用法をKRやJPは多く用いているかについて使用率を調査した。崔(2006)、최진희·조남성(2007)は本稿と同じくKRへの「のだ」の指導を見据えた考察であり、韓国語のどのような形式が「のだ」に対応するのか参考にできることから、本稿では用法の範疇をこれらに従うことにした。최진희·조남성(2007)での14の機能・用法を図表で示すと〈表1〉のようになる³⁾。

〈表1〉 최진희·조남성(2007)における「のだ」の範疇

<p>1.平叙文(文を名詞化し、一つの事態に関連する文内の要素に焦点を合わせる機能) A:そんなに飲み会ばかりしていたら、体を壊しますよ。 B:飲み会に行きたくて、行っているんじゃないですね。</p> <p>2.疑問文(疑問詞とともに使われ、一つの事態に関連する文内の要素に焦点を合わせる機能) A:久しぶりに髪を短くしてみました。 B:どうして、そんなに短く切ったんですか。</p>	ス コ ー プ の 機 能
--	---------------------------------

3) 術語の日本語訳は筆者による。用例の下線も筆者。

<p>3.説明(先行文脈についての理由を表し、話者の状況を理解させる) A:たしか、明日でしたよね？旅行に行く日は。 B:旅行は取りやめました。昨日、妻が入院したんです。</p> <p>4.換言(先行文脈の意味を他の表現に変えて表す) A:前回の留学は失敗だったという話は本当ですか。 B:ええ、前回は自分自身の問題で失敗しました。自分のやる気の無さに問題があったんです。</p> <p>5.解釈(目の前の状況を見て、判断した事実を表す) (落ちていた財布を見つけて) A:見て見て！これ財布じゃない？きっと、誰かが落としたんだ。</p> <p>6.前置き(本論に入る前に、前もって話者の状況を伝える) A:告白したいんですが、タイミングが分かりません。 B:タイミングは自分で見極めるしかありません。</p> <p>7.具体化(先行文脈の内容を具体的に叙述する) A:先ほど友達から連絡がありました。親友が事故に遭って入院したらしいんです。 B:お見舞いに行く方がよさそうですね。</p> <p>8.推論(先行文脈から生じる結果を類推して叙述する) A:どうして山田さんは電話に出ないのですか？ B:今、会議に出席しています。たぶん、それで電話を取れないみたいなんです。</p>	<p>文連結の機能</p>
<p>9.実情の提示(相手が知りたい規定の事態を提示する) A:今日は気分転換に口紅をつけてみたんです。 B:あっ、そう言われればそうですね。なかなか似合っていますよ。</p> <p>10.教示(相手が知っていなければならない内容を教える) A:(母)いくら遅くても12時まで帰ってくるんだよ。 B:(娘)うん、分かっている。そんなに遅くならないよ。</p> <p>11.命令(相手が行動すべき望ましい事実を要求する) A:打て打て！打つんだ！ B:言われなくても分かっていますよ。</p> <p>12.再認識(自身が既に知っていたが、忘れていて、再び、それを認識する) A:あっ、そうか。こうやってこの公式を使って解けばいいんだ。 B:やっと、気づいたみたいだね。その公式を覚えておいたほうがいいよ。</p> <p>13.強い主張(相手の意見と関係なく規定性が強い話者の決心や主張を表す) A:(先生)お前の実力では東大は無理だぞ。 B:(学生)どうしても受験したいんです。</p> <p>14.認識の強要(相手が簡単に認識できない話者の規定の事態を正確に理解できるよう促す) A:今度の町内マラソン大会、誰が良いかな。 B:私なんてどうですか。 A:42.195キロです。普通じゃ、無理ですよ。 B:大丈夫ですってば。(中略)長距離にはちょっと自信があるんです。</p>	<p>態度表明の機能</p>

次に、野田(1997)を概観する。野田(1997)の精緻な理論は多くの研究者から重要な論考として認知されている。この事から本稿も野田(1997)の理論に従うことにした⁴⁾。「のだ」

の本質・基本的機能を考察した野田(1997)は「のだ」を《スコープの「のだ」》と《ムードの「のだ」》に分けた。《スコープの「のだ」》は「～のだ」の「～」を名詞化するものであり「の」+「だ」という組成に近い機能を果たす⁵⁾。《ムードの「のだ」》は文を名詞に準じる形にすることによって話し手の心的態度を表すものであり⁶⁾、《ムードの「のだ」》は《対事的と対人的》及び《関係づけと非関係づけ》の二軸で分類できるとした。整理すると〈表2〉のようになる。

〈表2〉 ムードの「のだ」 野田(1997:67)

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味としてQを把握する	Pの事情・意味としてQを提示する
非関係づけ	Qを(既定の事態として)把握する	Qを(既定の事態として)提示する

KRの意見文に出現する「のだ」の用例が최진희・조남성(2007)が示す14の機能のどれに分類できるかを判別するのは容易ではない。そこで本稿は최진희・조남성(2007)を精読し、14の機能を野田(1997)に当てはめることにした。そして、〈図1〉のようにⅠ類からⅤ類のコードを設けた⁷⁾。

A. スコープの「のだ」(Ⅰ類)		
B. ムードの「のだ」		
	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Ⅱ類 (解釈/具体化/推論)	Ⅳ類 (説明/換言/前置き)
非関係づけ	Ⅲ類 (再認識)	Ⅴ類 (実情の提示/教示/命令 /強い主張/認識の強要)

〈図1〉 本稿における「のだ」の分類範疇

意見文に現れた「のだ」の用例を前後の文脈を勘案しながら최진희・조남성(2007)に従って、「のだ」がどのような機能として用いられているか見当を付け、さらに〈図1〉に基づいて分類し考察を加える手法を取った。

4) 野田(1997)の論考は全ての研究者から支持を得ているわけではない。例えば、庵(2013)は「スコープ」という考え方は言語普遍的に自明ではないとしており、名嶋(2003)は「のだ」の「先行発話・状況との関連」は受け手の積極的な推論の結果、主体的に見出されるものであるという主張をしている。

5) 野田(1997:104)参照

6) 野田(1997:58)参照

7) スコープの「のだ」は「～なのではない。～のだ」が典型的な形式であり、ムードの「のだ」は「前文脈との関連の有無」「対事的か?対人的か?」の二軸に基づけば良いので用例の分類がより容易になる。

4. 調査方法

本章では調査方法について概要を示す。まず、調査にはインターネット上で公開されている「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011)を利用した。

これに収められている「インターネット時代における新聞の必要性」というテーマで書かれたKRの作文57編とJPの作文134編を調査対象に用いた。作文の文字数は1編あたり約700～800字程度である。KRは学習時間600時間以上の学習歴があり、全員がSPOTver.2⁸⁾のテストを受けている(平均50.69点、標準偏差10.24点)。

調査の手順はデータベースのKR/JPの作文から[ノダ][ノデアル][ンダ][ンデアル][ノデス][ンデス]の形がとられる文を抽出する。抽出したデータを基に1.出現数と形式、2.学習歴及びSPOT得点の関連、3.用法と出現位置、4.述部での現れ方、5.不自然な用例の五つについてJPの作文と比較しながら意見文におけるKR「のだ」の用い方を調査した。

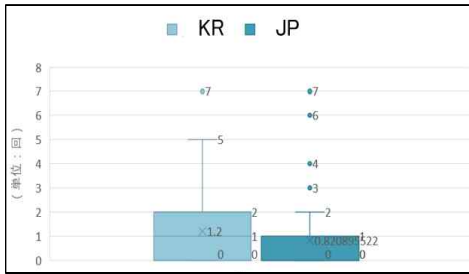
5. 調査結果

KRの意見文には918の文があり、66の文(7.19%)が「のだ」で終止していた。一方、JPの意見文には2176の文があり、110の文(5.06%)が「のだ」で終止した。以降、本章ではこのデータについて前章で挙げた五つの観点から調査結果を見ていく。

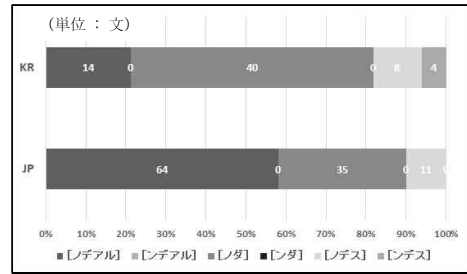
5.1. 出現数と形式

作文1編あたりの「のだ」の出現数をグラフにしたものが〈図2〉である。また、意見文に現れた「のだ」の形式と比率を整理すると〈図3〉になる。

8) SPOT(Simple Performance-Oriented Test)は、自然速度の音声聞きながら問題文の空白一か所に平仮名1文字を補って書き、文を完成させる日本語テストである。筑波大学で1991年から開発された。



〈図2〉 作文1編あたりの「のだ」の出現数



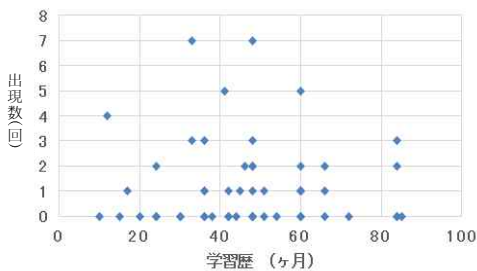
〈図3〉 「のだ」の形式と比率

「のだ」がKRの意見文には1編あたり平均1.2回出現し、JPの意見文には1編あたり平均0.8回ほど出現していた。KRの方がやや多く「のだ」を用いているが、出現数の平均値に有意差はない($z_0=1.52^* < z_{0.05}(1.96)$)。KR、JPともに最小出現数は0回、最大出現数は7回で両者とも「のだ」が現れる数には個人差が大きいことが分かる。

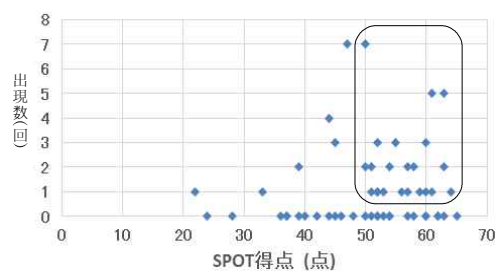
「のだ」の形式はKRは[ノダ] [ノデアル] [ノデス] [ンデス] の順で多く現れており、JPは[ノデアル] [ノダ] [ノデス] の順で多く現れ、多く現れる形式に両者で違いが見られた。また、[ンデアル][ンダ]は両者の意見文に現れなかったが、KRの意見文には[ンデス] という形式が現れるのに対し、JPの意見文には[ンデス]が現れない。JPの意見文を日本語作文の規範とするなら、意見文においては[ンデス]を使うべきではないと言えるだろう。

5.2. 学習歴及びSPOT得点の関連

次にKRの意見文に現れた「のだ」の出現数と日本語学習歴及びSPOT得点との相関をグラフに示す⁹⁾。〈図4〉は1編あたりの「のだ」の出現数と学習歴、〈図5〉は1編あたりの「のだ」の出現数とSPOT得点の相関図である。



〈図4〉 「のだ」出現数と学習歴



〈図5〉 「のだ」出現数とSPOT得点

9) 「のだ」の運用に関しては学習歴やSPOT得点のみならず、論理的思考能力など様々な要因が関わっているものと考えられる。本来は、それらも考慮すべきであるが、今回は学習歴とSPOT得点のデータしか得られなかったため、調査対象を二つの要因に絞った。

「のだ」の出現数と学習歴に相関は見られなかった($r=-0.044$)。「のだ」の出現数とSPOT得点についても相関係数は低い($r=0.135$)。しかしながら、〈図5〉から分かるように、「のだ」を1回でも使用したKRはSPOT得点が50点以上の高得点を得た者が多い、という傾向が窺える。「のだ」の出現数が学習歴ではなく、SPOT得点との関連性が窺える点は「のだ」が一定水準以上の日本語能力を要する形式であることを示していると言えるだろう。

5.3. 用法と出現位置

ここでは「のだ」の用法と段落における出現位置についての結果を示す。まず、KRとJPの意見文に現れた「のだ」の用法を整理すると〈表3〉のようになる。

〈表3〉 「のだ」の用法 (単位：文)

	KR (%)	JP (%)
I類	1 (1.5)	1 (0.9)
II類	0	0
III類	0	0
IV類	39 (59.1)	98 (89.1)
V類	26 (39.3)	11 (10.0)
合計	66	110

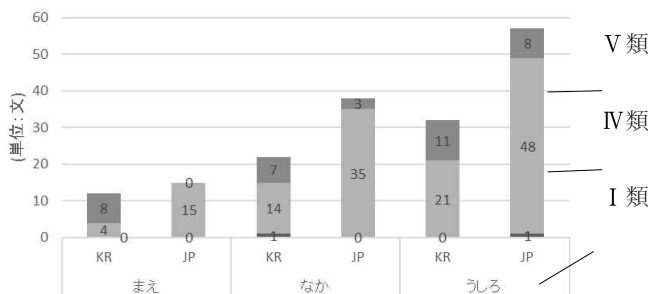
II類とIII類の用法はKR、JPともに現れなかった。II類とIII類は事態の把握に関わる用法である(表2参照)。意見文を執筆する時点では既に事態の把握は完了していると考えられ、執筆時点においては把握した事態をどのように相手に表現するか(提示するか)が問題になる。ゆえにKR、JP両者の意見文ともII類とIII類の用法が現れないものと考えられる。

II類とIII類以外を見てみると、IV類が最も多く、V類がそれに次いで、I類は1例しか現れない点はKR、JP両者に共通する。しかし、JPの意見文はIV類が約9割でV類は1割しか現れないのに対し、KRの意見文はIV類が約6割でV類が約4割出現するという違いが見られた。

次に、どのような用法が段落のどの位置に現れたかを見ていく。出現位置は1段落が6文以上で構成されている場合、第1文と第2文を「まえ」、第3文以降を「なか」、最終文とその前文を「うしろ」として便宜的に定義し、相対的に段落のどの位置に、どのような用法で現れるのかを調べた。1段落が5文以下で構成されている場合は〈表4〉のようにした。〈図6〉がどのような用法が段落のどの位置に現れたかの結果である。

〈表4〉位置の定義(1段落5文以下の場合)

位置 \ 文数	1	2	3	4	5
第1文	まえ	まえ	まえ	まえ	まえ
第2文		しろ	なか	なか	まえ
第3文			しろ	しろ	なか
第4文					しろ
第5文					



〈図6〉段落における「のだ」の位置と用法

KR, JPともに「うしろ」「なか」「まえ」の順に「のだ」が多く現れている点が共通している。また、IV類が各位置に現れる出現率についても両者に大差はない¹⁰⁾。しかし、V類は、JPの意見文では「まえ」に現れないのに対し、KRの意見文では「まえ」に多くの比率で出現している点が特徴的である。以下、KRの意見文に見られる段落の「まえ」に現れたV類の「のだ」の用例を示す。

- (1) KR001-01~03¹¹⁾ 何ヶ月前、韓国の有名な俳優のう人が、インターネットの無分別なじょうほうにきずついて自殺するじけんがあったのである。このように最辺インターネットのたいしゅうかによる無分別なじょうほうのながれが問題になっている。どちらが真実で、どちらがうそかわからないまま、人たちにしぜんにじみているわけだ。
- (2) KR011-06~07 また、インターネットのはってんがすごいだけれど、それは最近の何十年の急はってんなので、まだ、インターネットを使うことに慣れなかった人が大いいるのだ。年が取った人よりそれに慣れるのにもっと時間がかかると思う。
- (3) KR021-06~07 先ず最初に、インターネットのジョウホウは書きやすいため、その分文章の誤字に気を使わないのである。新聞や雑誌が何度も書きなおすことは大きく違う。

10) IV類の用例全体を段落の位置別に「まえ」「なか」「うしろ」の順で割合を示すと、KRは10.3%, 35.9%, 53.8%であり、JPは15.3%, 35.7%, 49.0%である。

11) 「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」で使われている執筆者番号。ハイフン(-)以降は文番号を示す。

用例(1)から(3)の用法は「実情の提示」に該当するものと考えられる。このようにKRの意見文には段落の「まえ」で具体的で否定しがたい実情を示して根拠を述べ、自身の意見の妥当性を補完するという手法が散見される。

それに対し、JPの意見文に現れたV類の「のだ」は用例(4)～(7)が示すように段落の「なか」や「うしろ」に現れ、「(と)思う」「べきだ」「てはならない」といった思考動詞や評価のモダリティ形式を伴って、書き手の考えを表す「強い主張」の用法として用いられていた。

- (4) JP004-14～15 以上のように、新聞・雑誌には利点・必要性があると思います。何よりも、新聞・雑誌を読むことによって得られる楽しみがあるため、私はそれらが必要だと思うのです。
- (5) JP017-13～15 e-mailが登場して確かに便利にはなりましたが、手紙を出すという古来からの習慣はなくなっています。そのことが示すように、私たちは利便性だけでは推し図れない何かを必要としているのです。それは情緒であったり、感触であったり、原始的なものであるかも知れませんが、そこには私たちが忘れてはならない、大切なものがあるのだと私は思うのです。
- (6) JP076-05～06 しかし、日々を有意義に、時間を効率的に使い生きていくためには、真実を知り、それを基に自分で考え、その時の自分にとって最良の選択肢を選ぶことが大事である。よって、私達は真実を知るすべを身に付けるべきなのである。
- (7) JP103-19～20 そして、人間がものごとを深く知ろう、考えようと思いつける限りは、その思考の様式を実現する新聞や雑誌はなくならな**い**だろう。そして、なくてはならないのである。

「なか」「うしろ」に現れた「強い主張」の「のだ」はKRの意見文にも見られる。

- (8) KR022-13～14 べつべつのほうでお互いにかたをならべていじされていくと思います。じっさいにすこし前e-bookというのができて、もうだれも本を買わないかもしれないと言ったうわさっていうかそんなよげんがありました。今も人々はふつうに本を買ってよんでいるので大変なへんかはないと思うのです。
- (9) KR046-12～13 今までの一方的なメディアから離れて主観的に考える力を育てくれるインターネットのニュースを教育資料に使ったり、活用すると今までのより得られるものが多いと思う。急に変わる世の中の姿を見せる一部分であって紙の新聞がなくなると悲しくなるとは思うが、その時代に適応していくことも大事だと思うのだ。
- (10) KR052-18～19 たしかインターネットの文ははやく見ることが出来る。でも私は文というのは、じょうほうというのは、もっと人間の手で感じながら読むのがせいせきだと思うのだ。

以上、JP,KRの間でIV類については大きな違いが見られないが、V類はJPが「強い主

張」の用法として段落の「なか」や「うしろ」で「のだ」を用いるのに対し、KRは「強い主張」のみならず「実情の提示」の用法として段落の「まえ」でも「のだ」を用いる、という結果を示した。

5.4. 述部での現れ方

本節ではKR、JPの意見文に出現した「のだ」が述部でどのように用いられているかを見ていく。野田(1997:21)の文の階層構造の考え方に基づき、「のだ」がどのような述語や構成要素を伴い、どの階層に現れたかを調べた。野田(1997)に基づく、日本語の文の階層構造は〈図7〉のとおりである。

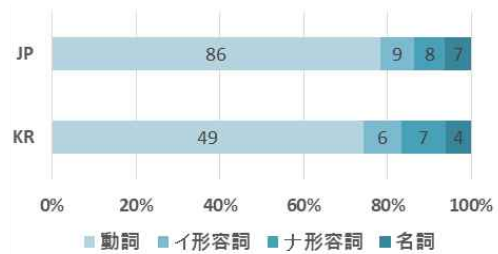
見 ら れ て い な か っ た ら し い ね
 (語幹) (ボイス) (アスペクト) (肯否) (テンス) (ムード)

〈図7〉日本語の述部の階層構造

まず、「のだ」がどのような述語とともに現れたかを示す。

〈表5〉述語の品詞の割合

	KR(%)	JP(%)
動詞	49 (74.2)	86 (78.2)
イ形容詞	6 (9.1)	9 (8.2)
ナ形容詞	7 (10.6)	8 (7.3)
名詞	4 (6.1)	7 (6.4)
合計	66	110



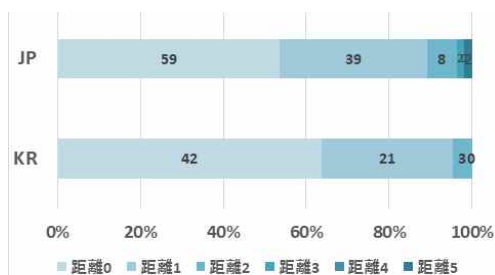
〈図8〉述語の品詞

〈表5〉 〈図8〉を見て分かるように述語は動詞が最も多く、動詞を含む品詞の割合もKR,JPの間で大差はなかった。

次に、「のだ」が述語からどの程度離れた位置に現われたかを調査した結果を示す。調査は「見るのだ」のように直接、述語に接続する場合は「距離0」、「見られるのだ」「見ているのだ」のように間にボイスやアスペクトを介する場合は「距離1」、さらに否定を伴って「見られないのだ」「見ていないのだ」といった場合は「距離2」のようにして位置を決めた。

〈表6〉 述語からの距離

	KR(%)	JP(%)
距離0	42 (63.6)	59 (53.6)
距離1	21 (31.8)	39 (35.5)
距離2	3 (4.6)	8 (7.3)
距離3	0	2 (1.8)
距離4	0	0
距離5	0	2 (1.8)
合計	66	110



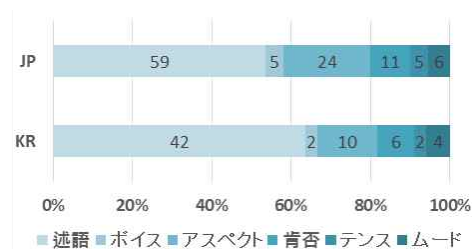
〈図9〉 述語からの距離

KR, JPともに距離0から距離2までに用例が集中しているのが分かる。ただし、KRは距離3以上の用例が無いのに対し、JPは距離3以上の用例も若干数見られるという違いがある。このことから「のだ」が現われる文はJPの意見文の方がやや複雑な構造をしている傾向があると言えよう。JPの意見文に現われた距離5の用例には次のようなものがある。

- (11) JP059-08 利便性を追求する現代社会において、新聞・雑誌の両者は社会のニーズに答えきれなくなってきたのだ。

〈表7〉 「のだ」が接続する述部の構成要素

	KR	JP
述語	42 (63.6)	59 (53.6)
ボイス	2 (3.0)	5 (4.5)
アスペクト	10 (15.2)	24 (21.8)
肯否	6 (9.1)	11 (10.0)
テンス	2 (3.0)	5 (4.5)
ムード	4 (6.1)	6 (5.5)
合計	66	110



〈図10〉 「のだ」が接続する述部の構成要素

最後に「のだ」が接続する述部の構成要素を示す。KR、JPともに「述語」「アスペクト」「肯否」「ムード」「ボイス」「テンス」の順に「のだ」が接続していることが分かる。ただし、KRは「のだ」がアスペクトに接続する割合が15.2%なのに対し、JPは21.5%とやや高い割合を見せた。また「のだ」が述語に接続する割合はKRよりも低い数値を見せている。これは先ほど触れた、JPの意見文に現われた「のだ」はKRの意見文よりも述部がやや複雑な構造をしているという事と関連づけられるだろう。

5.5. 不自然な用例

日本語学習者が作文で書いた「のだ」が正用かどうかの判断は簡単ではない。KRが書いた「のだ」の用例に対する正誤判断は複数の母語話者で行うのが望ましいと考えられるが、今回の調査ではそれが叶わなかった。そこで本稿では用例の正誤判断を数日の間において2回行う手法を取った。以下、1回目と2回目の判断でどちらとも不自然と筆者が判断した用例を提示する。まず、冒頭の1文目で「のだ」を書いている用例が確認された。

- (12) (再掲)KR001-01~02 何ヶ月前、韓国の有名なげいのう人が、インターネットの無分別なじょうほうにきずついて自殺するじかんがあったのである。このように最辺インターネットのたいしゅうかによる無分別なじょうほうのながれが問題になっている。

芸能人が自殺するという痛ましい事件に最初に触れ、その後、インターネット上の無分別な中傷を問題視している。既に起った事実を先行文脈と関連付けること無く提示しているためV類の「実情の提示」に分類したが、唐突な感じが否めない。また、たとえIV類の「前置き」の用法であるとしても「前置き」は多分に口語的で意見文のような論理的文章にはそぐわない。

次にKRの意見文には[ンデス]という形式が4例出現した。

- (13) KR007-20 もう新聞や雑誌はいるんです。
 (14) KR049-14 それをいいかえると、そのじょうほうをけんさくする人の能力によってじょうほうをみえるかみられないかになるんです。

このような[ンデス]の形がとられる文はJPの意見文には出現しない。[ンデス]という形式は口語的であり、論理的文章にはなじまない印象を与える。JPの意見文に[ンデス]が出現しないのも、このような理由があるからだと考えられる。

最後にKRの作文には「のだ」を連続して使用する用例が確認された。

- (15) KR017-07~09 そのため、インターネットのニュースを見るためには家や事務室のようなところしか見られるのである。それともパソコンを持ち回りながら、見るしかないのである。それで、いつでもどこでも見られる新聞や雑誌が必要なのである。
 (16) KR051-14~16 本のかたちで作られた場合は時間が立っても長い間ほぞんでくれるのにインターネットはきかいの問題でたくさんのしりよを全部失ってしまうきけんせいがあるのだ。ほかにも教育の

ためとか社会のためなどいろんなりゆうがあるが、たいひょう的に上の二つのことで私は新聞や雑誌はこの世で心要なものだと思うのだ。心要なさそうに見えやすいものもそこにはかならずそんざいするりゆうがあるのだ。

「のだ」の連続使用はJPの意見文でも1例確認できた。そのため用例(15)(16)のような連続使用が必ずしも不自然であるとは言いきれないが、連続して文末形式が同じである文は、やはり、どこか洗練さに欠ける印象が否めない。不自然ではないとしても、意見文執筆時に注意すべき事として教師が指導していく事項の一つに含まれるだろう。

(15)(16)のような「のだ」の連続使用に関しては文章作成の技巧上の問題であるが、用例(12)~(14)の不自然さは話し言葉、及び、書き言葉としての「のだ」の用法と形式との関連をKRが理解していない事に起因していると考えられる。話し言葉と書き言葉の違いという観点から「のだ」の用法を学習者に指導する必要があるだろう。

6. まとめ

本稿はインターネット上で公開されている「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011)に収録された「インターネット時代における新聞の必要性」というテーマで書かれた意見文を調査対象に用いて、JPの意見文と比較しながらKRが如何に「のだ」を使用しているか、その実態を調査した。

その結果、意見文1編あたりの出現数、「のだ」の用法を考慮しない場合の段落での出現位置、述部での「のだ」の現れ方にはKRとJPの間で大きな違いは見られなかった。

一方、「のだ」の形式やV類(先行文脈との関連が弱く、ある事態を既定の事実として相手に提示する用法)の出現率及び段落での出現位置についてはJPの意見文とは異なる結果が見られた。形式に関しては、KRの意見文は[ノダ]という形式が最も多く出現したのに対し、JPの意見文には[ノデアル]という形式が最も多く出現した。また、KRの意見文にのみ[ンデス]という形式が出現した。V類に関しては、JPの意見文には約1割しかなく「強い主張」の用法として段落の「なか」「うしろ」に出現するのみで、「まえ」には出現しないという結果が得られた。それに対し、KRの意見文はV類が4割あり、「なか」「うしろ」で出現する「強い主張」のみならず、段落の「まえ」で「実情の提示」の用法としての「のだ」が散見されるという結果が得られた。

上記の結果から得られる指導上の知見としては、「のだ」の書き言葉、及び話し言葉としての用法と形式の関連をKRに理解させる必要がある、という事である。

まず、[ンデス]という形式はKRの意見文にのみ見られ、JPの意見文には見られなかった。[ンデス]は多分に話し言葉の形式であり、ゆえに論理性が求められる意見文のような文章においては相応しい形式ではないという認識をJPは持っていると考えられる。JPデータは必ずしも多くはないが、JPの意見文を日本語作文の規範とするなら、この種の文章においては[ンデス]という形式を用いるべきではない。

また、KRの意見文ではV類の一つである「実情の提示」の用法がJPよりも多く散見された。「実情の提示」の用法自体は文脈によって意見文においても用いられうるであろうが、用例(12)のように第1段落の第1文目で用いるのは、やはり唐突すぎて不自然な印象が否めない。会話であれば冒頭であっても問題ない文も、文章においては文脈と用いる位置に注意する必要がある、ということを学習者には理解させなければならない。この「実情の提示」の用法も多くは[ンデス]や[ンダ]という形式で、話し言葉において用いられやすいと考えられる。故にここでも用法と形式の関連を学習者には注意させる必要がある。従来、「のだ」は多種多様な用法を持つことから、これらをどのように指導するべきかは数多くの議論がなされてきたが、「書き言葉か？話し言葉か？それはどのような種類の書き(話し)言葉か？」という観点から論ずるものは決して多くない。今後、「のだ」を巡る考察にはこの点についてももっと注目していかなければならないだろう。

本稿は調査対象者の母語の影響、すなわち韓国語の影響を考察することはできなかった。今後は、調査データを増やすとともに韓国語の影響も考慮に入れながら、KRが論理的な文章において「のだ」を如何に用いるのか更なる解明に努めたい。

【参考文献】

- 최진희, 조남성(2007) 「한국인 일본어 학습자의 「のだ」 의 기능별 사용현황에 관한 고찰」 『일본문화학』 제34집, 한국일본문화학회, pp.145-164.
- 庵功雄他(2001) 『中上級を教えるための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク、pp.282-290.
- 今村和宏(1996) 「論述文における「のだ」文のさじ加減」 『言語文化』 33、一橋大学、pp.51-78.
- 大場理恵子(1995) 「「のだ」「のか」の習得上の困難点について」 『言語文化と日本語教育』 第9巻、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.229-245.
- 清水まき子(2012) 「学術論文でノダ文はどのように用いられているか」 『日本語/日本語教育研究』 3、日本語/日本語教育研究会、pp.73-89.

- 田野村忠温(2002)『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』、和泉書院、pp.1-53.
- 崔真姫(2006)「『のだ』と『것이다』の対照研究-文法化の度合いの違い-」『日本文化学報』第29輯、韓国日本文化学会、pp.27-43.
- 塚原真紀(1998)「日本語学習者の会話における「ノダ/ノデス」の使用実態に関する一考察」『筑波応用言語学研究』5、筑波大学文芸・言語研究科応用言語学コース、pp.71-84.
- 名嶋義直(2003)「いわゆる「論述文」におけるノダの使用条件-学習者の作文を中心に-」『日本語教育』118号、日本語教育学、pp.37-46.
- 野田春美(1997)『日本語研究叢書9「のだ」の機能』、くろしお出版、pp.11-104.
- 松本美里(2004)「OPIデータに見たノダの使用について」『日本語教育研究』第6輯、韓国日本語教育学会、pp.25-40.
- 宮内桂子(2015)「丁寧体の談話における「のだ」の使用実態-日本語母語話者と韓国人日本語学習者の使用を執心に-」『日本語学研究』46、韓国日本語学会、pp.17-37. (DOI: 10.14817/jlak.2015.46.17)
- 泉子・メイナード(2005)『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』、くろしお出版、pp.91-99.
- 若生正和(2011)「『んです』が多いんです:韓国人日本語学習者の文末丁寧表現の考察」『大阪教育大学紀要』第1部門59巻第2号、大阪教育大学、pp.129-139.
- 日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース(2011) (<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ijuin/terms.html> 검색일: 2020.04.15.)

논문 투고 일자 : 2020. 03. 30.
논문 심사 일자 : 2020. 04. 24.
게재 확정 일자 : 2020. 04. 24.

 <要旨>

韓国人日本語学習者の意見文における「のだ」の使用実態

飯干和也

本稿は「日本・韓国・台湾の大学生による意見文データベース」(2011年3月)に収録された韓国人日本語学習者(以下、KR)と日本語母語話者(以下、JP)の意見文を調査対象に用いて、JPが書いた意見文と比較しながら、KRが文末において如何に「のだ」を用いているか、その使用実態を調査したものである。

調査の結果、1. 意見文1編あたりの「のだ」の出現数、2. 段落での出現位置(「のだ」の用法を考慮しない場合)、3. 述部での現れ方にはKRとJPの間に大きな違いが見られなかった。一方、KRの意見文には[ンデス]という形式が出現したのに対し、JPの意見文には出現しないなど「のだ」の形式面で違いが見られた。また、先行文脈との関連が弱く、ある事態を既定の事実として相手に提示する用法(V類)の「のだ」はKRの方が出現率が高く、段落の前方部でも出現するという点がJPと異なっていた。そして、KRの意見文に見られる不自然な「のだ」の用例には1. 「のだ」の不必要な付加、2. [ンデス]の使用、3. 「のだ」の連続使用の三つがあった。

上記からは“「のだ」には書き言葉及び話し言葉としての用法があり、用法と形式の関係を理解させなければならぬ”という指導上の知見が見出される。

 On the Actual Usage of “*No Da*” in Opinion Statements
 Made by Korean Learners of the Japanese Language

Kazuya, IIHOSHI

This paper presents a survey of how Korean learners of the Japanese language (hereinafter “KR”) use “*no da*” (meaning “the fact is that”) at the end of a sentence and the actual conditions of its use in comparison to written opinion statements by native Japanese speakers (hereinafter “JP”). The survey is based on opinion statements made by KR and JP recorded in the “Database of Opinion Statements of Japanese, Korean, and Taiwanese University Students” (March 2011).

According to the results of the survey, no significant differences existed between KR and JP in terms of (1) the number of occurrences of “*no da*” per opinion statement, (2) its position in the paragraph (if the usage of “*no da*” is not taken into consideration), or (3) the way it appeared in predicates. However, there were differences in the form of “*no da*,” such as the appearance of the form “*n’ desu*” (an abbreviated polite form) in opinion statements made by KR. By contrast, this form did not appear in opinion statements by JP. Further, there were differences in the rate of occurrence of “*no da*” usage (type V), characterized by a weak relationship with the preceding context and the presentation of a certain situation to the other party as an existing fact; this was more frequent for KR. The phrase also appeared at the beginning of the paragraph in only the KR utterances. Moreover, there were three examples of unnatural uses of “*no da*” seen in the opinion statements of KR, including (1) the unnecessary addition of “*no da*,” (2) the use of “*n’ desu*,” and (3) the continuous use of “*no da*.”

In conclusion, it was determined that there are distinct usages of “*no da*” as per written language and per spoken language, and it is necessary for KR to understand the relationship between usage and form for the purpose of language instruction.